

## [1 ページ: 巻頭言から続く]

夏から秋にかけ、森でたつぷりと採ったベリーをジャムにしたり、キノコを冷凍したりして長い冬の保存食に、今もしているという。ぼくが子どもの頃の日本には、まだあった生活だ。そう、フィンランドはどこなく日本(昔のかな…?)とよく似ているように思う。

ただ、今決定的に違うのは、“生きる”上での生活。日本はどんどん格差がひらき、「子どもの貧困」という言葉までが日常的に聞かれるようになっていく。フィンランドは全体的にいい国、全てもうまくいっているというわけではない。しかし、この国がつくりあげてきた根底にある考え方が今も生きているのだろう。福祉国家として「公正」「平等」「安心」を軸にすえた政策をとってきた成果だといえるように思う。

医療や教育の無償、社会保障の充実。「税金が高いだろう」と言われる。確かに税金は高いが、命や教育など人が人として生きていくことに心配がいらぬから、多くの人は不安や不満は持っていないようだ。消費税が二十数%でも食料品は半分。

基礎学校(小・中学校)では、えんぴつから給食(栄養管理とアレルギー等への個別配慮)まで全て無償。大学生・院生には、必要に応じて住居手当や勉強手当を受ける権利があり、返還の義務のない奨学金制度もある。どこかの国とはえらい違いだ。

フィンランドの教育では、かつて「公正と平等」の実現こそが政策的にもっとも優先される課題だったようだ。その結果としての「学力世界一」(PISA)だったようだ。しかし、そのために今、数量的評価に過剰に反応する動きも現れ、テストが増える傾向が生まれてきているよう。その結果、日本と同様に、成績の高さと子どもの学びの意欲(内なる動機)の低さが課題になってきているようだ。

それにしても…、「高校入試・受験がないため、塾という産業がない」とか「問題集も売っていない。作っても売れないでしょう」と言われた。「学校での学習が1番大切、テストもそれぞれの学校で学んだことをもとに作られ、しかも記述式が多い。それをしっかりと身につけることがその先の高等学校や職業学校という自分の希望する進路にもつながる」と。しかも『進路』そのものが中学(基礎学校7-9年生)での教科として重要な学びとなっている。だから職業によつての偏見や差別はない」と、フィンランド在住15年の日本人母、その夫のフィンランド父は語ってくれた。

保育所に通う園児の最後の年に行っていた「就学前教育」が今年から義務化された。どの子どもも学校生活や学校での学習というシステムや環境の変化で成長が阻害されないように、1年間かけてゆっくと遊び感覚で認知能力を育て学校生活様式や行動を身につけていくことを目的としているようだ。

この1年の他にも、4歳児健診をひじょうに細かくていねいに行い、心身の障がいや発達障がいなどを早めに発見して、対応することを大切にしている。

こうした健診も含め、産まれる前から学校に入るまでの間、健診、妊娠・出産・育児相談などを行う「ネイボラ」という組織が各居住地域ごとに設置されていて、病院も併設されるなど。妊娠が確定し、子どもが誕生して小学校入学するまでの長い間、切れ目なく子どもの成長を支え、親と家族をサポートしてくれる“公的子育て支援の拠点”としての役割を果たしている。

こうして見てくると、フィンランドに流れる空気ゆつたりさとやわらかさが、「安心」と「信頼」の中から醸し出されているように感じられてくる。

そして、フィンランドでは、教師を《国民のろうそく》といい、尊敬されてきている。教師という仕事への誇りと社会的地位の高さや教育をつくるという専門的職業としての位置づけが教師を育てているのかもしれない。競争と管理で脅す教育ではなく、人を育てることに十分な金をかけ教師の自由な裁量を保障する教育が国の政策となっている。

ゆつたりとしたやわらかい空気の流れる日本にしたと感じているこの頃である。



私たちが自由が丘を応援しています!

りんゆう観光ホームページ

<http://www.rinyu.co.jp>

北海道の風土・文化情報ならカムイミントラホームページ

<http://kamumintara.net>

JOYFUL COMMUNICATION  
Rinyu  
Kanko

株式会社 りんゆう観光